

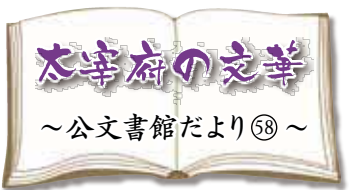
金のウソと替えましょ

— 鉄道開通と神事の盛況

明治22（1889）年12月11日、博多（久留米（当初は筑後川北岸に千歳川仮停車場）間で九州鉄道が開通します。二日市に置かれた停車場は（現JR九州二日市駅）、同35年に太宰府馬車鉄道ができるまでは、太宰府天満宮に最寄りの駅でした。列車のスピードは時速25キロ程度ドイツ製の機関車はそう大きくはないものだったようですが（『九州鉄道大観』）、貨車や客車を連ねて走る姿は当時の人々を驚かせます。

開業翌年の2月、九州鉄道は新聞に広告を出します。太宰府天満宮の神事、鷲替え・鬼すべに合わせ、2月25日と26日は臨時列車を運行するというものです。現在この神事は西暦1月7日に行われますが、当時は旧暦で開催されていたため（明治43年から西暦で開催）、この両日に臨時列車が設定され、そのための新たな車両も用意されました。

「ご存知、鷲替え神事では「替えましょ、替えましょ」のかけ声で参加者が各々の木鷲を交換し合うもので、取り替えた鷲に当たりが出れば「金の鷲」が渡されます。いつから金鷲の授与が始まったか、新聞に金鷲の記事が見えるのは明治23年の鷲替えからで、もともと人気の行事に、この年は前年末の鉄道の開通も手伝い大混雑、福岡市内も神事目当ての宿泊客で大いに繁盛した様子です（『福陵新報』。こ



の時金鷲を引き当てたのは穂波村（現飯塚市）の一男子。福岡日日新聞の取材を受けたためか、当選者は2月27日付紙上に「わたくしは純金の鷲を当てました。」という6行分の広告を出しています。余計な事ですが、1行1日分3銭という同社の取り決めで計算すると、この広告料は18銭。当時1紙の値段は1銭5厘でしたので、引き当てた幸運には、新聞代12日相当の出費が伴いました。

金鷲は明治27年の鷲替えから、太宰府天満宮が用意した2個と九州鉄道が寄進する10個と、全部で12個が定数となります。この年は金鷲の増量に合わせてか参詣者も増加し、鷲替え当日の二日市駅利用者数は1万2千人を超えました（『福岡日日新聞』）。以後、金鷲当選者全員の住所氏名は新聞で報道されるようになります。

明治40年、国が九州鉄道を買収したことで、会社側が出していた金鷲10個の寄進が途絶えてしまいます（『福岡日日新聞』）。その後は太宰府天満宮で全部をそろえ、毎年12個の金鷲が参詣者に贈られました。この頃の鷲替えは「宮崎宮の玉せせりに劣らない」激しさで、時には乱闘騒ぎもあつたようですが、幸運の金鷲の行方は群衆に紛れた神職さんに守られ、純粹な気持ちで神事に参加する人に、そつと当たりが手渡されていたようです。